大学体育研究　10：1－20，1988

座　談　会

生涯スポーツ時代に向けての大学体育の役割を語る

金子　明友（筑波大学体育専門学群長）
成田十次郎（筑波大学体育科学系長）
山川岩之助（筑波大学体育センター長）

司会　高橋　伍郎（筑波大学体育科学系教授）
松田　義幸（筑波大学体育科学系助教授）

はじめに

高橋　伍郎氏

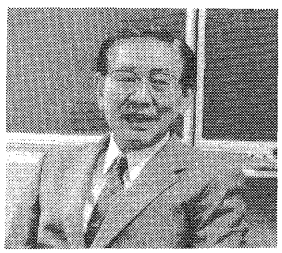
高橋　今日の会の進め方を，3部構成で考えております。1番最初が外部環境の変化と生涯スポーツの振興ということであります。2番目が，筑波大学の生涯スポーツに対する研究と教育のあり方について，3番目が，体育センターを生涯スポーツの研究と教育の実験校――かつての教育大の小，中，高の附属高校――にすることができないか，この3部構成で考えています。

それぞれについて，最初に，松田先生から体育センターの研究会のまとめをお話をしていただき，その後に先生方から，専門のお立場でのお話をしていただきたいと思います。

センター長の山川先生からこういうことで検討せよということもありましたので，初めにごあいさつを兼ねてお話しをお願いしたいと思います。

山川　今日は，大変お忙しいところありがとうございました。

実は私，この体育センターに着任をいたしましてから，今後，体育センターが抱えている問題をどういうふうに解決したらよいか，アプローチしたらよいかを考えておったんです。



山川岩之助氏

1つは，生涯学習，あるいは生涯教育という問題です。労働時間が減って余暇時間がふえるという背景の中で，特に生涯スポーツの問題がクローズアップしてきたわけです。この文脈の中で考えてみますと，体育センターは一般共通体育を担当しているわけですが，我々が指導の対象としている学生は，学校教育として終わりに位置してるわけです。ここで生涯教育向けの資質の向上，あるいは生涯スポーツに関する知識，技術，方法という能力を身につけて出ていくことが必要なのではなかろうか，これから，変化していく生活環境に適応していくためにも，ぜひ必要な教育ではなかろうか。そんなわけで，特に正課体育について，生涯スポーツの立場から再検討してはどうか。こういうことをセンター長の立場から提案していたわけです。

そのほか，施設問題とか，あるいは我々の管理体制の問題，あるいは組織，機構をどうするかとか，現在，3つの大きなプロジェク

トで進めています。その中の1つとして，特に正課体育を中心としての問題が，今日のテーマとなったわけなんです。

生涯スポーツについては，いろんなことがいわれておるわけですが，ここでひとつ広くいろんな観点から検討していただいて，皆さんのご意見を伺って，体育センターとしてよりよい教育を目指したいと思っております。

特に，今日は統計調査研究部会が，『大学体育研究』という，センターで出しております研究誌の編集を担当しておりますので，そこが企画の主体になりまして，今回のこの座談会を開いたということでございます。

ひとつ忌憚のないご意見をお聞かせいただければと思います。

高橋　それでは，この第1部について，簡単に，松田先生から，説明をお願いします。

第Ⅰ部　外部環境の変化と生涯スポーツの振興

松田　外部環境の変化と生涯スポーツの振興について，先生方にご意見をお伺いする前に，これまで検討してきたことを要約したいと思います。

人生50年型社会から，人生80年型社会への移行ということがいわれております。人生80年というのは生涯生活時間に直しますと，ほぼ70万時間になります。そして1年間約2千時間を40年間働いたといたしまして，8万時間ですから，労働時間は人生のほぼ1割ということになります。代わって，自由時間が，少なく見積もっても21万時間の3割にはなるだろうと予測されています。そういう時代に向けて，日本人はどういう生き方を欲しているかということを経済企画庁が調査してみました。これまでは，人生は子供の時期，教育の時期，労働の時期，そして引退という直線型人生であったわけです。そして，直線型人生の中に，6・3・3・4ということで教育の時期が入っていました。

松田　義幸氏

ところが，大手ビジネスマンを対象にした調査では，労働と教育とレジャーを，もっと柔軟に選択できる複線型人生がいいと，75％の人が望んでいるのです。こういう人生パターンについて，OECDはリカレント型人生，またはそれに対応するシステムをリカレント型教育といっておりますけど，生涯教育，生涯学習のことを言ってるわけです。

こういう流れを，臨教審も重視し，また，文部省の中でも生涯教育が重視され，生涯教育システムをつくり上げていくという，大変大きなテーマになってきたわけです。先日，お茶の水女子大学の森隆夫先生がある会合で，生涯教育カリキュラムは，一番最初に生涯スポーツで幹をつくって人間関係を楽しいものにし，(これはみんなに共通している楽しみであるから)それに文学だとか，絵とか，音楽とかのカリキュラムを重ねていけばいい。生涯教育カリキュラムの中で，生涯スポーツはメジャーなカリキュラムになると言われておりました。

そう考えますと，今後，学校体育中心ということから，学校体育も含め生涯スポーツ教育システムに変えていかなければならないだ

第Ⅰ部の問題提起

a）人生50年型社会から人生80年型社会への転換
　6・3・3・4の学校教育システムから生涯教育(学習)システムへ
b）学校体育中心から，学校体育を含む生涯スポーツへの移行
c）コミュニティー・スポーツ/企業内スポーツとアウトドア・スポーツの振興
d）筑波大学の外部環境変化に対するイノベーションの視点

ろう。具体的には，都市におけるスポーツの振興と，リゾートにおけるスポーツの振興と２つに分かれるのではないかと思います。都市再開発の視点で，スポーツ施設の充実ということは大きな重点施策になってきておりますし，リゾートの中でのスポーツの振興ということも，リゾート法が通りまして，これも大変大きなプロジェクトに今やなりつつあります。

このように時代が変化していることに対して，筑波大学はどのように対応していったらいいか，どういうイノベーションを図りながら対応していったらいいか，この点について，先生方のご意見をお伺いしたいと思います。

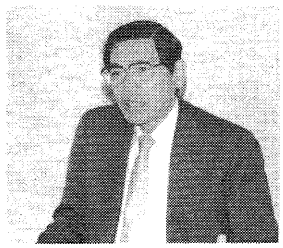
以上お話してきましたことを，フローに画いてみましたのでこの図(図１)を見ながら，ひとつお話をお願いしたいと思います。

高橋　そこで，成田先生に先生のご専門の立場から，生涯スポーツの重要性が，認識されてきたその背景について，お伺いしたいと思います。

成田　それではスポーツの世界の背景について考えてみたいと思います。我々に一番密接な位置にスポーツをおき，その外に教育の問題とか，社会，経済，政治，思想，その他をおいてみたい。そう考えた場合に，スポーツがどういうふうに変化してきたのかということなんです。

そこで，日本と割合似た国として西ドイツを例にとり話をしてみたい。例としてのアメリカは，私には余りにもかけ離れているという感じがするんです。西ドイツを例にとってみると，大体1960年ごろが１つの時代の変化ではなかったかと思っています。

第２次世界大戦で，負けた国も，勝った国も大変な痛手を受けた。それから経済再建に取り組み，大体1960年ごろに，一応の基礎産業の復興ができた。生活にも少しゆとりができてきた。大まかに言えば1960年ぐらいからスポーツが盛んになってきた。その場合のスポーツは，私は，わかりやすく言えば，クラブ・スポーツの時代ではなかったかと思っております。別の言葉で言えば，組織化されたスポーツの時代と言ってもよいと思う。



成田十次郎氏

西ドイツでは，クラブというものの中に競技エリートも，一般の市民も含んで，誰でも入れるわけですけれども，1960年ごろから本格的に発展し始めたと言えると思う。

西ドイツでは，大体1960年代に国民の約10％がスポーツ・クラブに入って活動してい

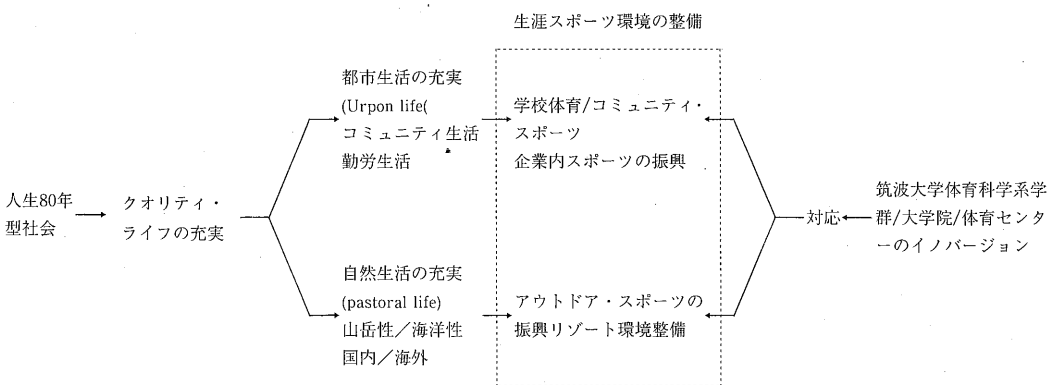


図１　外部環境変化への筑波の対応

る。戦前よりも，発展した状況が生まれたと思っています。

この頃は，ヨーロッパの社会主義諸国で言えば，高度に発達した社会主義社会をこれから目指すのだという時代でしょうし，西側にすれば，高度産業社会の到来ということを背景にしていたんではなかろうかと思います。

そして，1970年時代に入ると，私は事情が少し変わってきたと思います。1960年代のスポーツを，クラブ・スポーツ，あるいは組織スポーツという言葉であらわすとすれば，70年以後は，みんなのスポーツといわれる時代だと思います。組織スポーツと同時に，組織に入ってない人々，いわゆる大衆的なスポーツというものも実施されていく。

西ドイツで申しますと，非常にはっきりしてるんです。70年代になると，約20％の国民層がスポーツの組織に入っている。それ以外の人も，いわゆる未組織スポーツとしてやるような時代になった。

私はこのころから，いわゆる脱工業化社会とか，福祉社会といったような言葉がスポーツに反映してきたと思っております。1980年代になると，はっきりこう変わる，生涯スポーツの時代に変わるというふうには，ヨーロッパの場合はあまり言えなくて，自然に，組織スポーツ，並びに大衆スポーツを含んだ，みんなのスポーツがより発展したのではないだろうか。80年代になると，西ドイツの場合だと約30％が組織の中へ入っている。

したがって，組織に入らない人のスポーツ参加を含めると，これは大変な数になる。当然，いわゆる余暇社会とか，あるいは高齢化社会というふうなこととも関連はしてると思うけれども，日本の場合のように生涯スポーツという言葉の意味合いが，みんなのスポーツという言葉ほど，ヨーロッパでは意味を持ってないんじゃないかなという気がします。

恐らくは，彼らはクラブに入ってるんでも，ちっちゃい子供から老人まで入ってやってるわけですから，日本とは違った意味合いを持ってるんではないだろうかというふうに思うわけです。

日本の場合は，一時クラブづくりということに血まなこになった時代がありますが，やがてそれを脱皮して，いわゆるみんなのスポーツという時代になったと考えられます。しかし，このみんなのスポーツも生涯スポーツと一緒くたになり，みんなのスポーツという言葉よりも，生涯スポーツという言葉が日本の場合には意味を持ってきた。私も，日本ではこの生涯スポーツという言葉がこれから大切になると思っているんです。

当然，生涯スポーツという言葉がいわれる背景には，さっき申しました脱近代と申しますか，脱工業とか，福祉社会とか，あるいは最近真剣に国際関係の上からもいわれ出した学習社会，生涯学習の問題，余暇社会の問題，あるいは高齢化社会，これらは非常に切実な問題として関係し，こういう状況が一度に押し寄せてきたと思っております。

このようなわけで，ヨーロッパとは違った意味で，生涯スポーツという言葉が，日本では重要になってきていると思う。日本のスポーツはこれまでどうも学校中心で来た。ヨーロッパの場合は，反対でありますから，そういう意味でも，生涯スポーツは私たちにとって大変意味があると言えると思います。

それから，日本は競技スポーツ中心で来たので，生涯スポーツは意味がある。あるいは教育中心のスポーツであったということでも，生涯スポーツは，意味がある。それから，高齢化社会ということでも，余暇社会ということでも，意味がありますし，教育が変化をしてきたということでも，生涯スポーツは，日本では非常に響きのいい，また大事な言葉ではないだろうかと思います。私は特別な意味を持たせて，これから日本でこの言葉を用い，スポーツ界の改革，改善を全般的に考え

ていくべきだと考えております。

高橋　それでは，続いて金子先生にご専門の立場から，人生80年を通じて運動し続けることの価値についてお話をお願いします。ほかにも，今，成田先生がおっしゃいましたけど，生涯スポーツの重要性の認識についてもお話しいただければと思います……。

金子　人生50年といわれていた時代から，今や80年と長くなり，運動生活の時間もそれだけ長くなるということは当然だと思うんですが，運動の効果とか，価値ということが，特に日本で最近になって健康意識の高揚などと結びついて認識され出したものと思われます。

十数年前，東京の国電でトレパン姿を見かけることは大変珍しかったが，今はトレパン姿で国電に乗ってもおかしくないし，それからデパートに，そういうようなスポーツウエアで行くことがおかしくない時代になっている。そういう点では多くの人がスポーツを楽しむことのできる雰囲気になってきています。これから将来に向けて，余暇時間はどんどんふえるだろうし，先ほど，松田先生からお話があったようにね。

金子　明友氏

それと，政策的にも，そういうスポーツをする環境づくりが，大きく変化してきて，スポーツをするチャンス，手軽に運動を楽しむことができる時代になることは確かでしょう。このように環境が整い，条件が整ったら，「我々はその余暇時間に運動するか」というと，それは基本問題とぶつかるんじゃないかと思うのです。

したがって，健康の維持，増進，並びに体力の向上とか，精神衛生上の効果とか，そういうスポーツのメリットに関することはよく認識されてくると思うし，それを当然のこととして受けとめて，知識としてよく理解することは，もう今でも起こっているわけなんですが，そのことが運動を長い間，本当に人生に大きなウェイトを占めて，運動を実際に融合させていくということとは，一概にイコールだということにならないと思うのです。

つまり，欠落してる部分があるのです。よくジョギングの話が出ますが，大抵は三日坊主に終わってしまう。必要はわかってるんだけれども時間がとれない。最後は，もうごろ寝ということになってしまう。ここで欠落してるのは何かなと考えると，本当に運動して楽しいとか，運動したいとか，そういう運動の衝動みたいなものですね，そういうものがないと，幾ら条件が整っても，続けてジョギングを楽しむということにはならないんじゃないかと思います。

そうすると，どうしても，そういうことを学習させることを，生涯スポーツの準備期である学校体育の時代に与えなければならない。単に学校体育は運動を，発育，発達の刺激剤としてやるとか，それから将来のための準備ということで，いろんな種目をつまみ食いをして，経験をふやすというだけでは，本質問題に立ち入ることができないんじゃないかと思うんです。

そう考えてきますと，本当に運動したい，運動すると気持ちがよい，気持ちが晴々するということを実感として受けとめるような，そういう何かを学校時代にしっかり与えておく必要があるんじゃないか。今までの学校体育は，どっちかというと運動は発育，発達の刺激剤としての力点をもちます。しかし運動には魅力というものがあります。これはチュービンゲン大学のグルーペ教授が言ってることですが，３つあって，１つは運動ができる――できるという表現は誤解され易いんですが――例えば今まで泳げなかった人が泳げるようになるとか，何かそういう運動

ゲシュタルトの発生があって，それをさらに練習すると非常に上手になり，スムーズになって，おもしろくなっていく。恐らく，ゴルフなんかもそうでしょうし，ゲレンデスキーなんかも，それぞれ新しい運動ゲシュタルトの発生のおもしろさを背景に持ってると思うのです。これを一般に運動の形成といって，Gestalten という言葉を使って説明するわけですけど，そういうことがベースにあって，それで夢中になっていく。おれの方がうまいとか，下手とか，わずかなところでも，自分の練習したことが自分にはね返ってくるような楽しさがある。恐らくゴルフに夢中になったり，ゲートボールでおじいさんおばあんさんが夢中になるのも，その中にそのような運動形成の問題が含まれているんじゃないかと思うのです。

そういう１つの基本的な要因があって，それを基にして今度は，例えばテニスで気持ちよくラリーができるようになるとか，体力がついたとか，何かが達成できるようになる。これを Leisten という概念で説明されてます。それは，運動のゲシュタルトが発生したというんじゃなくて，今まであった運動ゲシュタルトを使って，何かが成しとげられて，それが個人にはね返ってきて何かを達成したという喜びにつながっていく。それが，グルーペ教授の言ってる２番目の要因なんです。

３番目が，そういう個人的なものではなくて，他人と一緒に協力してプレイすると非常に楽しい。そういうプレイの世界が非常に大切にされる。つまり，ゲートボールでは，単に孤独な老人じゃなくて，仲間が集まっていろいろプレイするというところに，あれだけのブームを呼ぶものを持ってるんじゃないかと思うのです。

こういう３つの運動生活を長続きさせる要因があって，これは全部アイソレートしてるんじゃなくて，絡み合っているわけです。したがって，こういう基本的なことが，いわば小，中，高，大学の間に，しっかり身体の中にしみ込んで，そういうものがベースになって，社会に出ても，今度環境が整い，条件が整うと，それに対応して，その運動生活が膨らんでいく。

つまり，今までの学校体育というのは，どっちかというと訓練主義というか，上から鍛える，つまり発育，発達の刺激を中心とした考えが強かった。ですから，ボールゲームやいろんなスポーツをやっておもしろくっても，その場限りで，もう後はやらない。そういう運動の衝動をかき立てるような大切な内容がどこかにいってしまっていたんじゃないかと思う。生涯スポーツということを考えると，そういうことを，教育期間といいますか，準備期間でやって，それを花開かせる受け皿として，スポーツの生活環境の充実が大切になってくる。

つまり，人生70年，80年という中で，今の成人ないし高齢者はそういうことが若い時代になかったわけですから，どうしても途中で学習させるとか，体験させて，スポーツ運動の本質的なよさをわからせることが必要になってくる。そこに生涯スポーツとしての，スポーツのよさをわかってもらう学習が必要になるわけです。ですから環境が整い，条件が整ったらやるだろうというだけではだめだと思う。つまり，そこでも生涯学習という中味が基礎にあって，それを基にして押し進めていく必要があるんじゃないかと思うのです。

さらに，人生80年を通して，運動生活が大きく拡大されて，ボケ老人にならないで，最後までスポーツを楽しむことができるというのには，高齢化社会を迎えるその後半の新たな学習体系というものを，我々は研究する必要があるんじゃないかと思う。今までの，運動の指導方法論の方ですと，チャンピオン・スポーツを教えるような，そういう研究は割合やられてるんです。だけど，全くできない

子供を，例えば逆上がりできない子をどうして逆上がりさせるかということは，今の学校体育でも，あまり考えられていないのです。というのは，逆上がりができなければ，それは腕力が足りないとか，腹筋が足りないと考えてしまう。そのためには，上体起こしをやって，腕立て伏せをやって解決しようと，こういう短絡的な考え方が出てくるんです。

今までの，日本のそういう指導ではチャンピオン・スポーツの方法論を，ある程度レベルを下げ，いわゆる初心者向きにアレンジしているだけで，ある程度のしごきを是認しながら，運動の指導が行われている。ですから，生涯スポーツという立場での指導方法論は非常におくれているんじゃないかと思う。

一方，チャンピオン・スポーツの分野は，じゃ，すごく進んでいるかというと，僕はそう思わない。これはこれで中途半端で，チャンピオン・スポーツの方も国際的にどんどん下向きになってきている。こっちも中途半端，生涯スポーツも中途半端で，どうも運動の現場の方の指導方法論そのものが，その考え方自体が，低調になってきているように思う。これまでの１つの方法論で，全部まかなえると思っているプリミティブなレベルに問題がある。そういうところの研究，開発を含めないと，生涯スポーツの人生80年の運動の効果，価値を高めるということには，ならないんじゃないか，これが僕の感想なんですが。

高橋　ありがとうございました。

次に山川先生には，これまでの体育系大学の学校体育中心の研究，教育から，生涯スポーツの研究，教育に脱皮することの重要性についてお話をお願いします。

山川　歴史的に考えますと，体育系大学とか，あるいは学部というのはまだ40年ちょっとしか経っていないんです。戦後，大学で研究が始まったということですから，私は，ほかの学問から比べると本格的な意味でということでは，まだ底が浅いんではないかと思います。

それから，この体育系大学も，学部もともに，学校の教員養成というのが主流できました。私は，今から10年ぐらい前に，幾つかの大学の体育学部系統のカリキュラムを調べました。それでわかったことですがカリキュラムのベースになっているのは，教職員免許法にある専門科目の16単位です。これに，後は単位数を膨らませていく。国立でも，私立でも，ほとんどの大学がそれをベースにしたカリキュラムです。

ですから，まさしく学校の体育の先生をつくるということがメインだった。社会体育を専攻したとしても，出てから専門職として終身雇用してくれるところはありませんから，当然，大学としてもサブの扱いになってしまいます。

戦後，レクリエーションが，社会体育のカリキュラムの中に入ってきた。しかし，これの大半はどこでやったかというと，行政が場を設定し，施設をつくり，指導者を再教育し，そして社会体育として進めてきた。これについての研究もだんだん盛んになってきてはいるが，まだレクリエーションは社会体育のメインにはなっていない。

いま生涯スポーツの重要性が認識されてきているわけだが，これはこれまでのレクリエーションの流れの延長から出てきたものではなく，生涯教育，生涯学習社会との関係で出てきたものだと思う。

さっきもお話がありましたように，労働時間が縮小し，余暇時間が多くなり，この余暇時間を，どう人生において意味のあるものにしていくかという，この問題と関係しているのです。その中に，生涯スポーツの問題が大きくクローズアップしてきたというのが経緯じゃないかと思います。

現状は，今，教員養成大学でも，幾つかの大学は，既に体育教員養成から，社会体育，生涯スポーツの方向へという脱皮をはかって

るわけです。それが成功するかどうかは，制度論との関係もありまして，必ずしもまだうまくいっていないというのが実情です。

これからは，一般の人たちが人生において，どうスポーツを生活の中で楽しんでいくか，この面についての研究体制，あるいは教育体制を充実することだと思うんです。本大学の体育専門学群をみても，これまでは教員養成をベースにしてきたと思います。学生のニーズも，やっぱり学校の先生になりたいというのが7，8割ということではなかったかということです。

これからは，体育系大学の卒業生が非常に広い分野で働くということを想定しておかなければならない。そのためには，それに即応したカリキュラムの編成をしていかなくてはならない。特に私は，今までの研究の成果は，学校体育，いわゆる青少年のスポーツに対して相当貢献しており，知見も開けてると思うんですが，今度は，それを21世紀へ向けて中高年層にまで拡げていくことだと思っています。この層に対し，一体どう対応するのかということは，まだ未知です。実際的には，経験上からやっているけれど，これをシステマティックな研究とか教育という体系の中で今までやってきたかというと，必ずしもやってきていない。仮りにあるにしても，非常に断片的であると思うのです。

これから，私は体育系学部は，もちろん学校体育を否定するわけじゃないですが，この，今まで着目されてなかった社会体育，生涯スポーツの問題について，研究体制を強化する必要があると思う。

そういう意味で，私が今提案しております，本センターの正課体育を，パイロットとしていろいろ考えていいんじゃないかと思っております。

第Ⅱ部　体育・生涯スポーツに対する研究と教育のあり方

第Ⅱ部の問題提起

a）時代の変化への対応。（児童数の減少→体育教師需要の減少/人生50年→人生80年，自由時間の増大→レジャー・生涯スポーツ・ニーズの増大。）

b）スポーツ・ビジネスの拡大/スポーツ関連ビジネスの拡大
—スポーツ産業（スポーツ・クラブ，リゾート・クラブ，レジャー・クラブの経営）
—生涯スポーツ環境のデザイン（建築家，環境デザイナー，公園デザイナー）
—スポーツ学習支援情報システム（コンピュータ・アナリスト，オペレーションズ・リサーチャー）
—スポーツ文化/スポーツ・マスコミ（ファション，フード，マスメディア，広告ビジネスからのアプローチ）

c）Good health is Good Business
—レクリエーション・リーダーからレジャー・カウンセラーの時代に（企業の厚生施策の充実）
—企業内レジャーシステム，生涯スポーツシステムの充実（ヘルス・マネジメント/ウェルネス・マネジメント）

d）Quality Lifeと生涯スポーツ
—労働組合の労働時間短縮，自由時間の増大，レジャー・スポーツへの対応

e）生涯スポーツへの行政の対応
—リゾート環境整備/林野行政/観光行政/自治体の生涯スポーツ振興

高橋　では引き続き第2部に移ります。1部でも多少関連した話が出てきましたけれども，筑波大学の生涯スポーツに対する研究と教育のあり方についてということで，また松田先生から問題を出してください。

松田　これについて，いくつか特徴を挙げたいと思います。

まず，時代の変化への対応ということですけれども，児童数が今，山川先生からもありましたように減ってきている。これが，即，体育教師需要の縮小ということにつながっている。しかし，その一方で，人生50年から人

生80年へと変化する中で，自由時間，余暇時間がふえ，レジャー，生涯スポーツに対するニーズが増加してきている。体育系大学，体育学部としては，従来の路線で縮小を図っていくか，イノベーションを起こしてサバイバルをとげていくかということになるが，縮小よりも，誰もが望むところは，イノベーションをはかって，サバイバルをはかっていくことであろうと思います。そうすると，レジャーとか，生涯スポーツの世界に，体育系大学，体育学部はいかに適応していくかということが問題になるのではないか。

2番目の問題は，一体どういう形で，レジャー，生涯スポーツ研究・教育のニーズが拡大してきているのかということであります。この点について説明してみたいと思います。

まず，私企業(プライベート・ビジネス)の動向から入ってみたいと思います。

最初がリゾート・プロジェクト／アウトドア・ライフのビジネスです。いずれも，今大変ポピュラーなビジネスになってきているわけですが，例えば建築士とか，都市工の専門家とか，環境のデザイナー，それから公園のデザイナーが，スポーツのライフ・スタイルに熟知していないと，彼らの仕事は成り立たなくなってきた。これまではビジネス中心，都市生活中心のデザインということであったわけですけれども，レジャー，スポーツの分野で，彼らが仕事をしようとすると，改めて，そういう能力のある人たちとのジョイント，並びに彼ら自身も，また現職で再勉強しなければならないということになってきた。

それから，2番目がコンピュータ・アナリスト，またはオペレーションズ・リサーチャーです。今，コンピュータが，教育の支援情報システムとして大変進歩してきてるわけですけれども，その中で，スポーツの世界にも関心が高まってきているように思います。それには，コンピュータ・グラフィックも非常に発達したということもありまして，スポーツのような動きのあるものについて，理想的な軌跡と，実際とをとり，そのギャップを出し，理想に現実を近づけていくための解析，サポートのシステム，情報のシステム開発ということが非常に大きなニーズとしておきてきてるんです。ここでもやはり彼らはスポーツに熟知したグループと共同研究をやりたい。また，そういうシステムをつくる側にも，こういうスペシャリストを育てていきたい。こういう動機が出てきているように思います。

それから，3番目はスポーツ・クラブ経営，リゾート・クラブ経営，レジャー・クラブ経営です。すべての産業が，レジャー，スポーツ・ビジネスへ，今や参入してこようとしております。スポーツの世界に熟知した，経験をもった管理職，経営者をいかに育成していくか。さらに，現在の，これまで専門としなかった管理職，経営者の人たちが，スポーツ，リゾート，アウトドア・ライフとは何かということについて再勉強する，そういうニーズも非常に強まってきているように思います。

4番目が，スポーツ文化，マスコミの世界です。先ほど金子先生からありましたように，スポーツはライフ・スタイルの中心に今やなりつつある。ファッションにおいて，食べ物において，テレビにおいて，雑誌，新聞において，また広告，イベントにおいてです。スポーツに熟知した人が，そのプログラムを開発する。そのサービスを行う。そのことからスポーツ研究に対するニーズが高まってきている。また，スポーツに熟知した人たちのこういう分野への進出を期待するようになってきています。

5番目が，Good health is good businessです。労働時間の短縮，自由時間の増大ということに対して，企業が積極的にその能力開発をサポートしようという姿勢が出てきております。その中で，今新しく注目されている

のがレジャー・カウンセリングという分野です。先ほど金子先生は運動の楽しみ方への3つの視点を挙げられましたけれども，そういう視点に沿いながら，そのスポーツへの気づき，さらには態度形成ということに，企業も積極的に支援しようという機運が出てきてます。従来の企業は，休息，休養の保養所をつくればよかった。これは，高度経済成長がそうであったといってもよいと思います。その後，70年代に入って，保養所は急速に人気がなくなってきまして，保養所の機能にアミューズメント，エンターテイメントの機能がつけ加わらないとだめになってきた。

ところが，ここ4～5年の傾向で，さらにアミューズメントの機能に，自己開発の機能，スポーツ，レジャー，文化のいろんなスクールのプログラムが必要となってきまして，これがリゾートの問題とかかわり，リゾートを人生80年時代のアウトドア・ユニバーシティにしようという機運も出てきてるわけです。

それから，もう1つ。企業は，Good health is good business で，ウェルネス・マネージメントとか，ヘルス・マネジメントという分野に大変関心を強めてきております。

6番目は労働組合からの関心です。労働組合はこれまで賃上げ運動1本できたわけですけど，今後は，所得と自由時間をバランスをさせたQuality of Lifeの改善ということに関心をもってきております。レジャー，生涯スポーツへの対応ということを真剣に考えてきております。

以上はプライベート・ビジネスの方の動向です。

次は，パブリック・ビジネスの動向についてです。まず最初が運輸，建設，通産，農林，国土，文部等々を含めて，リゾート，スポーツに対する現職教育ニーズが高まってきていると思います。地域の人づくり，地域振興からリゾート・プロジェクトは重要施策になってきてるわけですけれども，法学部を出たとか，経済学部を出たとか，そういう人たちが，リゾートの問題と取り組まないと予算配分ができなくなってきた。そこで，そういう勉強のニーズが高まってきている。もちろん，そういう専門の知識を持った人たちを採用していかなければならなくなってきています。

それから2番目に，林野行政の現職教育です。我が国の森林資源というのは，これまでは経済資源であったわけですけれども，今後レジャー・文化資源として転換していかなければならなくなってきた。そうすると，林野行政の関係の人たちが，改めてアウトドア・ライフとは何か，スポーツとはなにかを勉強すると同時に，今後そういう人材を求めていかなければいけなくなってきた。これは非常に強いニーズとして今起きていることです。

3番目が，観光行政のイノベーションです。これまでは休息，休養のツーリズム中心の観光行政であったわけですけど，これからは滞在型観光行政に変わっていかなければならない。そうなりますと，そこでサービスされるプログラムとして，レジャー，生涯スポーツのプログラムが，メジャーなものとして出てくるわけですけど，この点についても，全くこれからの問題で，こういうところにも人材が必要とされ，さらに現職教育に対するニーズも高まってきてると思います。

四番目に，自治体のニーズですが，市，町，村，県，どのレベルにおいても，今や生涯教育，または学習社会という環境整備が急務になっています。その生涯教育のプログラムの中で，生涯スポーツは非常にメジャーになってきている。ここでも，そういう人材と研究の必要性が高まってきています。こういうふうに考えていきますと，筑波大学の，生涯スポーツ振興に向けての研究と教育のあり方はいかにあるべきか，がみえてくるような気がします。それには学群，学系，大学院，体育センターが互いに協力し合っていくことではないかと思うのです。体育センターの側から

みると，体育センターのこれからのあり方が，多分こうなっていくのではないかと思うのです。正課体育・公開講座を，生涯スポーツ振興に向けての研究と教育の実験校にするということです。

学群，大学院の担当の教官と体育センターの教官が協力し合って，生涯スポーツの教育システムを開発し，それに基づいて正課体育の場で，専門学群の学生との交流を図る，大学院の学生との交流を図る，さらに，大塚地区の方の，これから開校されるであろう大学院の現職教育のスクーリングのセンターとして使うこともできる(もちろん，うちには体育会の各種部活動もありますから，現職教育の方々のコーチのスクーリング機会にすることもできる)。体育センターはまさに生涯スポーツの研究と教育の on the job learning のセンターというわけです。

そして，こういう流れになってきますと，現職教育に学び，帰っていく彼らの職場，プライベート・ビジネスの職場，パブリック・ビジネスの職場に，専門学群の学生たちが就職する機会，また大学院の終了生たちが就職する機会の開発にもつながっていくのではないかと思います。

したがって，生涯スポーツとしては，生涯スポーツのシステム・マネジメント，生涯スポーツのコーチ・マネジメント，生涯スポーツのヘルス・マネジメント，この3分野が，今後重要になってくるのではなかろうかと思います。

このフローチャート(図2)を見ながら，議論をお願います。

高橋　今，プライベート・ビジネスとか，パブリック・ビジネスとか，マーケット・ニーズとか，生涯スポーツのシステム全体についての話まで出てきたわけですけれども，これを踏まえて，金子先生に，学群教育の立場から，将来どのように志向させたいとお考えになっているか，お話をいただきたいと思います。

金子　非常に難しい問題で，なかなかすぐにどうこうということにはならないんですが，うちの学群には教育課程検討委員会というのがありまして，そこでいろんなことを検討しているわけです。今，松田先生がいわれたように，いろんな分野でスポーツの新しい意味の需要がふえるということには，同感で

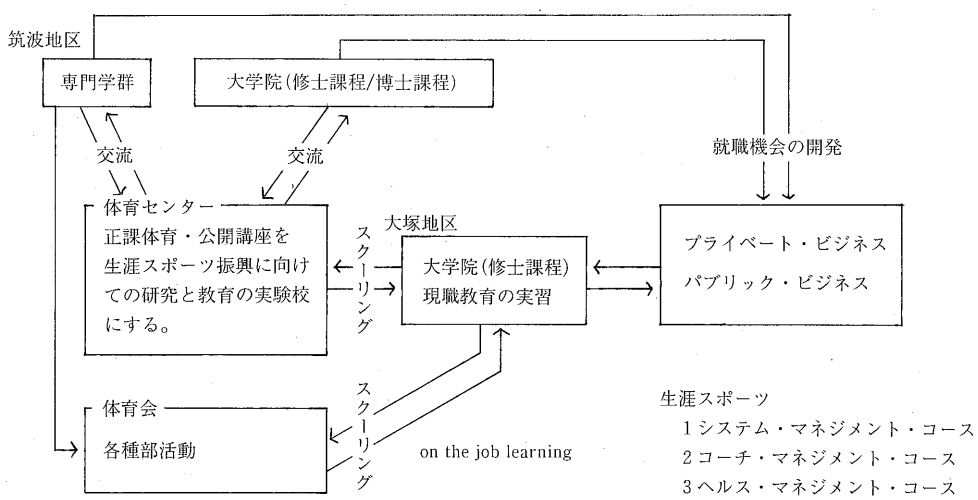


図2　筑波大学の生涯スポーツ振興に向けての研究と教育のあり方

す。したがって，うちの学群は専門教育ですから，将来そういうものに対応できるような学生を送り出していくことに当然なるだろうと思います。

ただ，そこで非常に難しいのは，マーケットといいますか，卒業した学生たちが，どこに行くかということの特定が非常に難しいことです。しかし，これまでのように学校に就職するという一本やりの時代ではなくなりましたね。けさのＮＨＫのニュースでも，教員の方は狭き門になって大変だという報道がありました。現にうちの学生の卒業後の進路も，いろんな分野に広がっていることは事実ですね。前の教育大学の時代とは大きく変化していると言えます。

そこで体育専門学群として専門家養成ということをどういう形で進めていくかが問題になります。各種学校みたいに，非常に短絡的に，何かに役に立つということで専門教育がなされていった場合に，またそこに不足が出てきたり欠落が出てきたりすると思うのです。そこに非常に難しい問題があります。どこかに定めた職業向けと固定していくと非常に難しい問題が出てくる。

第３学群の工学系が同じような問題を持ってたんですね。よその大学と違ってうちの工学がすごくいいと言われているのは，非常にフレキシビリティを持っているからといわれてます。そこでは基礎をしっかりたたいてどれにでも対応できる柔軟な教育をしていると聞いております。したがって，就職は引く手あまたらしいんですね。

体育の場合も，今松田先生がいわれたように，これからどんどん変わっていくということになると，一体どうすればいいのか。これは基本問題とぶつかりますね。今もいろんなカリキュラムの検討をやっていますので，これは体育の先生向けとか，これは生涯スポーツ向けとか，そう単純にいかないものもあるんです。現在のところでは，どっかに力点をおいてそれをケルンにしながら，他もちゃんと識見を持てるという，そういうフレキシビリティを持った学生をここから出していくしか，今のところしょうがないんじゃないかと思っています。

時代に対応するといって，そう簡単に対応できるのでもありません。そういう点で考えますと，やっぱり１つは教育の面に出ていくといいますか，学校教育に大きなウエイトを占めることはいうまでもないでしょう。それに併行して運動も十分に指導でき，これからの新しいニーズに応える力をつけることが大切だと思います。それからどの分野にいくにしろ，生涯スポーツの分野にいくにしろ，運動というものを教えることができる，それが一番中核になると思います。今の運動の指導というのは，本当に運動を指導しているんじゃなくて，子供たちが自分で運動ができるようになったのを自分で指導したと思いこんでいるのではないかと思うのです。例えばある指導計画をつくって，指導者はきょう何回練習をやれ，これをやれと言っているだけで，あとはその実行の管理だけを任務としてます。ところが実態は，子供たちが自分でいろいろ工夫し，試行錯誤を繰り返しながら，ある１つの運動を形成し，それに習熟している。つまり，表現は悪いんですけど，管理者的発想の指導者というのが，その実態じゃないかと思うのです。その運動そのものをやっている選手なり生徒に入り込めないんですね。ですから，ひどい話が，こうこうやれと言ってある指示を出す。子供はいろいろやってできるようになる。それを自分の指導がよかったからできたんだと勝手に思いこむわけです。実際は，その子供が，先生の言ったとおりやったのではなくて，自分で工夫してやったんだからできたのに，先生がそう言うものだから生徒はありがとうございますと言う。何かうわべだけ教授・学習の形式がととのって，内面的にはかみ合っていないように思います。

特に体操競技みたいな場合はですね，技を教えられないコーチはまさに無能なんで，何もできさせることがないということだとどうしようもないのです。

前にイギリスからグリーンウッドさんが，ラグビーの指導で来られましたね。そのとき，管理者的コーチはできるけれども，その学生の運動の中に入り込んでいくような指導がほどんどできていないというんです。選手の感覚に入り込んでいくようなコーチを今までは，職人的コーチといって，ある程度さげすむようなことがあったんですけれども，本当にその運動する人の中に入り込めるような指導こそ教育の原点として大切なんです。まさに職人芸的かも知れませんが，それが本当の運動の指導だと思うんです。

高橋先生を前にしてなんだけど，修士課程長の田代慶一郎先生(文芸・言語学系)が水泳をセンターのプールで練習されていて，高橋先生のコーチの仕方について，本当に感激しているんですね。普通のプログラム組んでこうやれ，ああやれというんではなくて，私みたいな年輩の者の気持ちをよくわかってくれる，気持ちをわかって運動をやれと言ってくれている，そういって，その指導の仕方に感心しているんですね。つまり，運動の実戦のときに，そういう体験をうちの専門学群の学生はしっかり身につけるべきじゃないかと思うのです。

そうすると，問題になってくるのは，そういうプログラムをいかにつくり，それをいかに使いこなしていくかということになります。それを生涯スポーツにどういうふうに役立てていくかということです。健康な人にも，ちょっとぐあい悪い人にも，科学的な知見を導入しながら，適切なプログラムを与え，運動者の感覚や感情を大切にして効果を上げる，そういう能力を持った指導者がこれからも要求されてくるだろうと思う。

学群のこれからの教育と言われて，今すぐどうこうということはできないんですけれども，スポーツの指導者というのは，どっかに力点というか，得意なものを持っていて，そういうものを核にして，いろいろな活動領域に対応できる柔軟性を持った指導者がうちから出ていけばよいと思ってます。

高橋　どうもありがとうございます。

成田先生に研究者の立場から，生涯スポーツ振興に向けてのあるべき研究ビジョンをお話しいただきたい。

成田　これは，全学の研究報告書に書いていることなんですけど，体育学とか，体育科学は，基本的には教育と医学を基にした科学であったと私は考えております。体育史とか，体育社会学とか，戦後私たちが領域を拡大してきましたけれども，伝統的に教育と医学というのが非常に強い基礎科学であったという気がしているんです。

私はいまそういう体育科学から脱皮する一番いいチャンスであるというふうに考えております。脱皮すると当然，研究対象をこれからどういうふうに拡大していくのかということが問題になります。従来の教育あるいは競技を中心にした体育科学の研究対象が，生涯スポーツの時代を迎えて非常に多様化してきていると思います。これは当然なわけなんです。先ほどから話されたように，企業でも，あるいは法律を勉強する人でも，経済を勉強する人でも，社会学をやる人でも，人類学をやる人でも，スポーツを見落とせない時代になってきているわけですから，当然，私たちは研究対象というのを拡大をしていかなきゃいけないというふうに思います。

非常に抽象的に言えば，教育，医学というものの発想を超えた，あらゆる社会的なというか，あるいは文化的なというか，あるいは人間的なというか，そういう現象として私たちの研究対象をとらえ直すような広い立場に立っていく必要があるだろう。これはもう当然のことだと思います。そういう点から，も

う一度，学系の研究の対象というものを整理し直す必要があるのではないかと思います。

それからもう１つは，研究方法も当然それに応じて拡大しなければならないというふうに思うわけです。今申したような，生涯スポーツの多様な現象をとらえるための方法論というものを，拡大していく必要がある。既存の私たちの体育科学では，とても追いつかないというふうに思っております。

特に私は大事なのは，方法論の拡大では２つのことがあると思っております。１つは，多様で非常に新しい学問の研究方法を，我々が取り入れていくことです。従来のような歴史学とか，社会学の外にも情報科学とか，人類学とか，その他多様でしかも新しい学問の方法を積極的に取り入れなければ，生涯スポーツの現象というのはとらえられないだろうと思います。だけど，私は，これはスポーツの基礎的な諸科学の拡大ということで，あまり難かしいことではないんじゃないかというふうに思っています。

研究方法の拡大ということで大事なのは，いわゆる生涯スポーツを科学するということです。この核になるような，研究の方法を確立することだろうと思っております。これは金子先生には，叱られるかもしれませんが，スポーツ実践の科学とでもいいますか，あるいはスポーツの実践科学というものの確立といえばいいんでしょうか。基礎的な諸科学というものを幾ら積み重ねていっても，スポーツの科学あるいは生涯スポーツの科学というものにならないんであって，学問として我々が独立することはができない。

そうじゃなくて，核になるような研究方法，これはスポーツ実践の科学，あるいは金子先生は運動学とかトレーニング学とか，そういうふうな種類のものを言われるかもしれませんが，私はそういうものを確立をするような努力をもっと積極的にしていかなければいけないんじゃないかなと考えております。その点で，体育科学系というのは，やっぱり脱皮する必要があるんではないかという気持ちを持っております。

私の力点は，今言った第２の問題にあるわけなんですけれども，しかし，第１の，多様で新しい学問の方法を積極的に取り入れていくということも，また同時にやらなければならないだろうと思っています。

こういうことについて，日本では，あまり科学論争というふうなものをやらないわけです。そういう意味では，学系の「紀要」とか，あるいは特別号とか，あるいは何か懸賞論文のようなものでも出して，新しい生涯スポーツの科学というものの構想を，若い人たちから募集するというふうなことをやってはどうだろう，ということも考えているわけです。

そういうことと関連して，研究者の養成というものを，体育科学系ではもう少し総合的にやっていく必要があるのではないか。マスター，ドクターと専門学群，センターも含めてですね，新しい研究対象の拡大とか研究方法の拡大に対応して，それぞれの領域で，研究者を養成するためのカリキュラムをつくる必要があります。そのために全体としてどうあったらいいんだろうかということも考えていかないと，現在のようなスポーツ界の状況の変化というものに応じた学問をするということは，つまり社会の人たちが私たちに求めている要求に応えることは，なかなか難しいと思っています。

東京教育大学の幡ガ谷の例を申しますと，１つの講座というものができると，20年たてば曲がりなりにもそういう研究者が組織的につくられていたわけなんですが，そういう意味では，一度やはり，こういう科学の構想というものを論議して，学系のあり方を考える必要があるんではないかと思っています。

高橋　山川先生には，体育センターの正課体育・公開講座を生涯スポーツ振興の実験校にするにあたって，ビジョンを語っていただ

きたいと思います。

山川　そこまで大上段に考えてたわけではないんです。要するにさっき言ったように，我々が今担当している学生を，実務的に見ますとね，これは生涯のスポーツの学校で言えば一番終わりのところになり，また社会に出て行く出発点のところになるわけですから，この大学の間に何を彼らに身につけさせていくかいうことが重要だと思うんですね。

金子先生も言われておりましたけど，楽しみとか歓びをスポーツを通して得るためには，まず知識や技術をどういうふうに身につけるか。それがなければ喜びも楽しみも本当はないと思うんですね。そういうのをどういうふうにつけさせていくのか。それは，今までのような形だけなのか，もっと多様なコースを設けて，学生のニーズをそこで拾い上げていくという可能性はないのかということですね。

１つ具体的に言えば，どうも長期欠席者が多いというようなのも，こちらが用意しているカリキュラムというか，プログラムが必ずしも学生にフィットしていないというか，そういう問題もあると思うんですね。個人のさぼりみたいなものもあるでしょうけど，やっぱり講座というか，プログラムの開設の仕方，持っていき方，中身の扱い方，これにも相当問題があるんではないか。そういう点から，プログラムの中身とアレンジを考えていくことはできないか。１年から４年まで，ただ直線的な単一の授業ではなくて，いろいろ学生の興味に応じたものができないか。

それから，公開講座も，生涯スポーツということになりますと，今は初歩とか中級とかいうことで，スポーツの解説的な，そういうことをやってるわけですが，私はこういう正課体育・公開講座の両方をやるにしても，さっきありましたように，学習支援情報システムを充実し，生涯スポーツの研究所を併設したフィールド・ハウスをつくって，そこで研究を深めて構想を具体化していくことが必要だと思います。簡単には出てこない。人力だけでいかないという難しい問題を持っているわけです。そういうことで正課体育は，大学生の４年間に生涯スポーツの生活の基礎として何をそこで授けていくのか，これをひとつ新しい角度から明らかにしていくことが必要じゃないかと思うんですね。

それから，そういうことをやるにしても，学系，学群との関連というのは当然必要になってくるわけです。問題は学系の方にもそういう研究体制ができれば，学群も，体育センターもそれに合った人選をして，この教育をやる，あるいは研究をやるという協力体制が必要じゃないかと思います。

もう１つ，そういう人選のためには，学群の方にも，それに必要な専門教育をやれる講座，講義がないと空振りになってしまう。体育センターだけの張りつけの人々だと，問題が出てきます。そういうことでやっぱり学系，学群，体育センターの３者連携といったやり方がよい。いずれにしても，私は，学群の教官の中にも，生涯スポーツについて非常に関心を持っている人がたくさんいると思うし，学生の中にいると思うのです。

このように学系，学群との連携の間にあって，生涯スポーツの研究ができれば，そういう授業を開設して，そこで大いにやることもできるようになる。そうすると正課体育を１つの手掛りにして，そこで実習もできるだろうということです。それから，生涯スポーツに対する１つの実験センターの機能も果たせるのではなかろうかと思っております。

第Ⅲ部　体育センターを生涯スポーツの研究と教育の実験校にするために

第Ⅲ部の問題提起

a）正課体育を体育専門群の学生の生涯スポーツの教育実習機会にする（専門学群の一般体育との交流）（基礎実技）

b）体育センター教官はそのために体育専門学群の学生に対して，正課体育の教育メソッドを開発し続け(注1)，理論，演習の講座を開き，教育実習の場でon the job learningをサポートする。
c）受講生は，スポーツを通して，他分野の学生との交流，違う学年との交流をはかれるようにする。
d）インドア・スポーツ，アウトドア・スポーツ，山岳性スポーツ，海洋性スポーツ，季節変化に対応したスポーツ種目を開設。初級，中級，上級ニーズにも対応。
e）一般受講生も，生涯スポーツのリーダーになるべく，指導機会を開いていく。
f）体育専門群の学生と他学群学生とのスポーツ交流を促進し，体育会の競技，試合に対する一般学生のオーディエンスとしての参加を刺激する。(University IdentityとしてのSport Performance)
注1：生涯スポーツ教育に資するために，指導情報の一般化，標準化をはかる。

高橋　それでは，いよいよ最後の第3部に入りますけれども，これも，松田先生からポイントを語って下さい。

松田　第3部は，体育センターを，生涯スポーツの研究と教育の実験校にできないかということです。正課体育を，体育専門学群の学生の生涯スポーツの教育実習機会にできないだろうか。それには専門学群の基礎実技との交流を図っていく。そのために，体育センターの教官，体育科学系の教官が協力し合って，体育専門学群の学生たちが正課体育を生涯スポーツの教育実習にする教育メソッドを開発し，そしてそれを理論，演習の講座にする。そして正課体育と生涯スポーツの教育実習の場にしていく。体育センターの教官，学系の教官は，その正課体育の授業の風景を研究としてとらえる。その成果を学生たちのon the job learnningに役立て，生涯スポーツの教育方法にしていく。こういうことはどうだろうか。

正課体育の受講生は，いろんな学群の学生たちのミックスからなり，スポーツを通していろんな学群の学生と交流を図れるようにする。今や異分野交流の時代であり，異業種交流の時代であるから，学生のときからスポーツ交流を通じてそういうマインド，態度をつくっておいたらどうだろうか。

さらに学年もミックスし，先輩後輩の関係をまたスポーツの世界でつくっていく。違う学年とのスポーツ交流というのもあっていいのではないか。そのための正課体育のメニューでありますけど，コミュニティ・スポーツに対応する種目，またアウトドア・スポーツ，山岳性スポーツ，海洋性スポーツ，季節変化に対応したスポーツの種目等々のコンセプトと，それぞれの教育の方法を開発し，さらにその効果もとらえ研究を深めていく。

そして，また初級，中級，上級のニーズにも対応できるようにする。それから次は，一般受講生も生涯スポーツのリーダーになるべく，その正課体育の授業の中で指導をしていく。それからこれは，効果ということになるが，体育専門学群の学生と他学群の学生とのスポーツ交流を促進すれば，体育会の競技・試合に対して，一般学生はもっと参加するようになるのではないか。そうすると，スポーツ・パフォーマンスを通じて，大学のアイデンティティをつくっていくことができるのではないか。筑波大学はいい大学だ，我々はここの大学に入ってよかったんだという，アイデンティティをつくっていくことができるのではないか。

さらに，もう1つ補足でありますけれども，正課体育と専門学群の学生の交流の中で，きょうはビデオでスポーツを学んでいる風景を専門学群の学生たちに撮らせるとか，写真を撮らせるとか，きょうはそれをニュース記事にまとめさせるとか，能力開発の場にも使うことができる。つまり，スポーツの価値の表現方法が，プレイとコーチとの関係だけではなくて，それは絵の世界，音楽の世界，詩の世界，踊りの世界，ファッションの世界，

スポーツの価値を生活文化全領域で表現するような，そういう学習機会にも正課体育というのは使っていけるのではないか。こんなことから体育センターは立派に生涯スポーツの研究・教育の実験校になり得るのではないかということです。

高橋　実際にあった話ですが，正課体育の水泳の授業の時に，ちょうど元好三和子(オリンピック銅メダリスト)が来合わせたことがあったのです。そこで，シンクロナイズ・スイミングの模範演技を見せてもらったわけですが，身近にそういう演技を初めて見て，びっくりしたり，感激したりで，すっかりシンクロのファンになり，オリンピックの時もすごい声援をおくったということがありました。

体育専門学群の学生が持ってるすごい，すばらしい技術とか能力とかに，一般学生が少しでも触れる機会があると,気持ちの上でも，今，ユニバーシティ・アイデンティティの話がありましたけれども，それをつくる機会にもなる。いま，言われた話はまだ夢だけれどもぜひ実現させたいと思います。

成田　基本的にはいまいわれたセンターの方向に賛成です。しかし，研究には，あるいは研究者の養成も含めて，非常に時間がかかります。これは当然のことであります。特に新しい学問というものは非常に時間がかかるわけなんですけれども，体育センターだけではなくて，学群，学系――特に学系に問題があると思うんですが――，大学院を含めて，体育センターの教官がどういう研究体制を組むのか，学系との関係でどういう体制を組めばいいのかというふうなことを検討することが大事であろうと思います。

もう1つは，やっぱり研究の対象と方法をきちっともった方々を体育センターの内部で育てていかないと，もちろんこれは学系全体の問題にも関係してきますけれども，体育センターとしても，そういう専門領域というものを確立して，それぞれがそういうものを持って成果を出し，そしてそれがセンターの生涯スポーツの教育に反映していく体制をつくる必要があるんではないかと思います。時代の流れからみますと，今の学系で非常に抜けているのは生涯スポーツの領域の研究と教育です。研究の組織とか制度というのは，一遍確立するとなかなか変えることができないので，そういう意味で体育センターが1つの方向を持って，そういうスペシャリストを養成していくと，それは社会に対応する学系の改善や充実にもつながるし，生涯スポーツの教育の充実にもつながっていくんではないかと思います。しかし，いずれにしてもこれは学系，学群，大学院，体育センター，全体の問題として,討議してもらいたいと思います。

基本的な問題として，こういう生涯スポーツの研究と教育を，体育センター独自で，独立して，全く新しくやっていくのか，あるいは学系や，学群や大学院と，全体的な枠の中で協力し合ってやっていくのかという議論をしてもらいたい。その点が1つ，私からのお願いです。これからの基本問題になる思います。

全体としてやっていくと，学系の立場から言えば，常に全員が学系員ですから，研究体制を組むということであれば，科学のそれぞれの領域の研究のどこをどういうふうにだれが受け持つのかというふうなことが問題になります。

おそらく，体育センターとして非常に希望が持てるのは，本学では，これまでの関係で学校の体育の研究・教育が中心になっていますね。そうでない新しい生涯スポーツの領域をセンターが中心になってどう積極的に開拓していくのか。あるいは新しい学問として，例えば，老人のスポーツとか，そういう新しい学問をどういうふうに開拓していくのか。新しい人材をどう採用していくのか。

そして，そういう領域での学問的な蓄積が

ない限り，教育というのはできないわけですから，そこら辺のコンセンサスを全体としてつくって，筑波独自の機能というものを持って，そういう研究者をつくり出していくことをやらないと，全体として体育科学系の力が100％発揮できるということにはならないのじゃないかと思っているのです。

金子　確かに，今，学系のあり方を検討していて思うことがあります。今までの講座の残滓がまだ残っていて，なかなか難しい問題が残っています。だから，あんまり小さく領域を固定しないで，もう少し大きなくくりでそれをとらえていくとか，また，学系の統一的な研究問題を取り上げて，１つのプロジェクト研究をもり立てていくとか，そういうこともできると思うんですね。

それから，僕も成田先生のお考えと似ているのは，体育センターだけで独立してやるというんじゃなくて，協力体制をつくってやるのが一番大切だと思うんですね。体育センターの方だけで全部これをやれるとは僕は思っていない。そうすると，生涯スポーツの進展のための研究と教育ということになると，むしろ体育センターの場合は，一般の他学群の学生なんか持ってますから，非常に有利な条件を持っているわけです。そういうところを踏まえてやるべきだなというのが１つと，もう１つは松田先生のいわれたカリキュラムの発想が非常におもしろいと思うんです。昔の大塚の場合の寮なんか全部，理科からも文科からも一緒の部屋に入ってたわけですからね，授業の中でも，そういうのが今できたらすばらしいなあと思います。ただ，全学のカリキュラム編成に関わっているので分かるのですが，みんなそれぞれが独立していてむずかしい問題もあると思います。ただ火曜日の１時間目に集まってきた学生を全部一緒くたにしてやるというのは不可能じゃないんじゃないのかなあと思ったりもします。そこから手初めにして，もしもそれがうまくいけば，筑波独特の正課体育というのができていくんじゃないかなと，今感じていたんですけれどもね。カリキュラムの考え方を変えなきゃいけませんね。

成田　生涯スポーツの時代を迎えて，体育センターと学群，大学院全体の教官の協力，協調をはかっていく時機にきたのではないかと思っております。例えば水泳なら水泳を研究するという人は体育センターと学群と大学院にたくさんいるわけでしょう。それが１つになって，スポーツ科学に対して研究の役割分担みたいなことをして，例えば，水泳の科学を，総合的にどういうふうに研究し教育していくとか。また，体育センターにも陸上の教官がいるわけですが，学群・大学院の教官と協力して，誰がどういうふうに研究していくか。全体として足りない研究・教育の領域はどこか。もう一度，大きな枠組で研究グループを広げる必要があると思うのです。あるいは組みかえる必要があると思うのです。

金子　僕は不可能じゃないと思うけど，相当な意識改革がないとだめですね，これは。だから，こういう発想で，考え方が皆さんによく理解されてくると，反対する人は誰もいないと僕は思うんです。むしろ，昔のしがらみでやっているわけで，それが問題です。時間かかるとしても，できるところから少しでも前進するほうが大切だと思いますね。

いまは他学群の学生とうちの学生が全くアイソレートされているでしょう。今の元好の話じゃないけどね，本当にそういうことは考えられるし。昔，体育学部でやってたときには，いわゆる学部祭に運動会があって，教官が一緒に走ったりしたことがあったのに，今は全くなくなってしまった。そのような運動会のときに，全学の学生と一緒に体育の学生もいたら，体育の連中がどのぐらいレベルが違うのかわかってもらえるしね。

学生たちの交流ができれば，非常におもしろいですけどね。まさに夢の部分になるけど，

全学のカリキュラム問題をやっていると，これは難しい問題にいろいろ直面するんです。体育センターの方にも基礎工の方は月曜日の5時間目に入れてくれとか，午前中の授業を解消してくれとか，いろんな問題が出てくるわけです。向こうは向こうで自分のことを考えてますからね。

松田　喜怒哀楽を他学の学生たちとのスポーツ交流を通じて共有するという，それがやはり我々が筑波で育ったんだというアイデンティティをつくり，さらに先輩後輩の関係をつくることにもつながる。スポーツというのは本当にそういう意味で文化の基幹をなすし，ぜひ金子先生には，そういうことで夢を実現するべく力添いをお願いします。これは大学自身の大きな問題でもあると思うんです。

金子　そうです。正課体育という考え方を少し変えないとね。全部それぞれの学群で別々にやっていたのではしょうがない。4単位やらなければいけないからという発想からでしょう。積極的なこういう認識がないままでやるわけですよね，義務づけられて。これは全学的な新しい試みとして提言すべきですね。

高橋　そうですね。やっぱりそうだと思いますね。だから，実際，それぞれの教官の知性というか，教官自身の考え方にもかかってくるでしょうね。

じゃ，最後に，山川先生にお願いします。

山川　大学の正課体育は，過去数回に危機にひんしたわけです。正課体育はやめた方がいいと。例えば，中教審の答申とか，設置審では，そういう問題でいつも爆弾を抱えてた。それを今までこれたのは，いろんな陳情や何とかでやや政治的な動きでお願いしてきたわけです。我が国の大学教育に対するイメージが，ヨーロッパの中世と言ってはなんですれども，そういう象牙の塔的な大学を考える傾向が強く，今日流の大学とは像が違うわけで，そこには体育は遊びだから，クラブ活動，課外活動でやればいいという発想が基底にあるわけです。

正課体育が生涯スポーツ教育だといっても，これを批判する人は，ただ泳いでいるだけかとか，ただバレーボールやってるだけとか，遊びのたぐいじゃないかと表面的なとらえ方をするわけです。私はこの正課体育の教育の中に，従来的な言葉で言えば，理論と実践と言いますか，そういう両方を正課体育でやってるんだということがないとだめだと思うんです。カリキュラムの組み方は技術的に非常に難しいけれども，それがないから，どうも大学の教育内容としては，ただ遊びをやっているというふうな受け取られ方をしてしまう。

生涯スポーツからいけば，どうしても理論をちゃんと押さえていかなければならないと思う。やっぱり研究者の本筋は研究の体系にあるというとらえ方をしないとぐあい悪いわけです。そういうふうにして，正課体育を変えていく，それの研究が必要だと思うわけですね。

それから，教育は今のように単線型，1年間同じ運動をやるという発想がいいのかどうか。そうではなくアウトドア・ライフ，野外活動的なものをどう取り入れていくか。こういう問題を扱っていかなければならない。こうなると理論がないとできませんから，ただテントの張り方の技術論だけじゃ合わない。自然に対する知識，生活の方法，自然の楽しみ方，そしてサークルのつくり方，文化活動をどう取り入れていくかとか，そういうプログラムづくりとか，そういう能力もなければいけない。それを教育しなければいけないわけですから，これは理論がないとどうしようもないという問題になります。

そういう問題を踏まえながら，正課体育を変えていくためには，やれるところから手がけていく。夢もいいけど，夢を少しでも実現

の方向へもっていくということになれば，今の体制の中でできるところから手をつけていくのがよい。

それからもう１つは，やっぱり学群や，さっきいろいろお話のあった学系とのかかわり合いの中で，生涯スポーツを促進するなら，それの研究体制も考えながら人選していく必要がある。スタッフを集める必要がある。そういうことでないとうまくいかない。一体化という話がありましたけれども，それをやらないとそれはうまくいかないだろう。こういうことだと思うんですね。

ただ，体育センターが学系や学群と違うのは，ここでは現実の問題として正課体育の授業を展開していかなければならない。しかも学群にない種目も展開していかなくてはいけない。しかも，もっと新しい生涯スポーツへ向けての問題にも取り組まなければならない。こういう問題があるから，そこいら辺，学群との関連をどううまくとるか。そういう点については，学群の教育でつっこんで積極的にやってもらう必要があります。また体育センターに来てもらって，そういう実習をやってもらうということもいいと思うんですね。まあ，いずれにしても，学群，学系との研究体制，それから教育体制を協力してつくっていくことが先決です。

私としては，こういう大きな理想的な話をもとにしながら，今日できるところから１つ１つ手がけて，具体化の方向にやっていくべきではなかろうか，こういうことなんですね。後の，人の問題とか，研究の問題は，こちらと学系，学群とも連絡をとりながら，どういう構想でやるか，そういうこともやっていくべきだと思う。

やっぱり改革というのは夢がないとできないわけでね。ただ現状でどうだどうだと，現状の問題を弥縫的に張り合わせていくだけでは，イノベーションは起こらないんです。そういう意味で，こういうことを，夢に関する話もあるけど，これを掲げながら一歩一歩具体的にどうしようかということを，できるところから実現する，こういうふうにやっていきたいと思います。

高橋　本日はこれにて終了したいと思います。本当にお忙しいところ，ありがとうございました。

（この座談会は，昭和62年10月22日に，体育センター長室において行なわれたものです。）